



写真3 洛中洛外図屏風の拡大写真。赤い着物の人物の背中に縦に走る線が鉛筆の寸法線。消すことができなかった。

と大久保純一教授にお願いしました。

標準的な洛中洛外図屏風は、京都の西側と東側で見られる景観と風俗が描かれ、二つで1双（一对）とされます。しかしながら記念館所蔵の屏風は片隻（屏風の片方の単位）しかありませんでした。もともと片隻しかなかったのか、それとも一双だったものが、ある時点で片隻になったのか。文献にも記録がなく長い間の疑問でした。

小島先生によると、この屏風は京都の西側が描かれており、屏風の標準的な作り方から見て左隻に相当することがわかりました。さらにその右側の貼紙には「京西山名所 并きたののつ（北野の図）」とあるので、東側を描いた右隻相当の屏風が実際にあったことがわかりました。制作者は不明ですが、同じ工房の作品と思われる屏風が現存しています。その中には、歴博所蔵の「歴博F本」と呼ばれる屏風があり、それには「法眼住吉具慶」の落款がはいっているものがあります。記念館所蔵の屏風の筆者とは考えにくのですが、何らかの関係を持つ工房の作品である可能性が考えられています。

そしてもっとも興味深かったのは、「貼札の文字は平仮名で書かれているため、女性を意識した作品、たとえば嫁入り道具として作られた可能性も考えられる。」ということです。貼札とは、絵に描かれている寺や橋などの名所がわかりやすいように、その場所に付箋のように貼り付けています。かつて屏風は嫁入り道具の一つでもあったため、このことから、もしかしたら歴代のお姫様の嫁入り道具の一つだったのかもしれません。

このような歴史的にも十分史料価値があることが確認されたことから、修理については経験豊富で信頼できる専門家に依頼しました。東京にある株式会社半田九清堂は国宝や重要文化財の修復を数多く手がけており、有珠善光寺の重要文化財についても修復の実績があります。政宗公と成実公の書状、そして屏風図の修理のほか、長年ホコリやカビ、着物のよれやしわが目立ってきたお雛さまのクリーニングを半田九清堂に依頼しました。半田九清堂の仕事はニューズレター第4号でご紹介しています。

書状と屏風は東京の工房に運ばれ、大がかりな解体修復が行われ、お雛さまのクリーニングは、専門家が伊達市に来て開拓記念館で作業を行いました。クリーニングは平成23年の冬に完了しましたので、今年の3月のひな祭りには綺麗になったお雛さまを多くの市民の皆さんにご覧いただくことができました。

そしてこの屏風は、歴博の企画展に出品することになりました。調査をした結果、国内では未発表の貴重な史料であったことと、修理をしたことで貸し出すことが可能な状態になったためです。

4. 調度品の調査

ここでは、貞操院御遺物とよばれる調度品の数々の名称と用途を明らかにする調査を行いました。

伊達市に寄贈されたときに、目録は作られていたようですが、名称や用途がはっきりしないものがいくつかありました。また、寄贈を受けた段階ですでに化粧道具や椀や皿といったお膳の組み合わせがバラバラになっており、どれが本来の姿なのかがすっかりわ



写真4 解体修理される洛中洛外図屏風。骨組みだけでなく、絵のはく離を防ぐ処置や、一部には補彩して再び組み立てられる。

からなくなっていました。

調度品をよく見てみると、女性が使う鏡や化粧道具が多く占めていることがわかります。そこで、化粧文化研究の第一人者であるポーラ文化研究所の村田孝子先生に調査をお願いしました。

160点以上の史料を一点づつ確認し、写真撮影をおこなった上で、道具の形、描かれている家紋、模様からグルーピングしていただきました。

その結果、これまで硯箱とされていたものが御料紙箱に分類されることや、鶴の骨で作られた簪（かんざし）が含まれていることがわかりました。

このような情報は、わかりやすく解説するための貴重な情報となります。

5. 古文書解読調査

最後は文献史学的な調査です。伊達家古文書史料の中には、藩主から下賜された品物や結婚に関する記録が残されているものもあります。修復した史料や、調度品の年代がおおよそ判断できたことで、次は古文書を調査して、現在記念館にある調度品の贈与の記録がないか調べました。

伊達家古文書史料の中には、亘理伊達家の日常や本藩からの通達文、自然災害や奇妙なうわさ話などが記録された史料があります。これを解読し、贈与の記録を探ることにしました。平成23年に刊行した「亘理伊達家史料」の監修をしていただいた北海道教育大学函館校の佐々木馨教授に、再び古文書の解読をお願いしました。古文書は4冊分ですが、解読を進めるうちに江戸時代の亘理伊達家と亘理町の様子が明らかになってきました。

中には宝永3年に亘理町に「大波」が押し寄せた記録が見つかり、荒浜の一部が海に浸かったという現象が明らかになりました。これが津波によるものなのか、それとも高潮によるもののかは現時点では不明ですが、百数十年前にこのような現象があった



写真5 黒漆地蟹牡丹紋歌書筆筒 江戸時代後期の作品だが、戸を開けたまま長年展示していたため、閉まらなくなってしまった。

ことは確かであり、今後防災等に役立つ史料といえます。

■今後の予定

武家文化財調査修復事業は平成23年度で完了しますが、これからは解読された古文書から贈与された調度品や、時代背景を調査していきます。また修理が完了した屏風などは、これまで以上に温湿度管理が求められます。史料に適した環境を維持しつつ、これまで「お宝」とされていた武家文化財が、「博物館史料」となる第一歩を無事に歩めるように、そして、市民の皆様に新しい発見と、新しい歴史像をお伝えできる日が早く来るよう引き続き調査をすすめていきます。

【展示会情報】

伊達市開拓記念館所蔵の屏風が展示されます。

人間文化研究機構連携展示

都市を描く－京都と江戸－第1部

「洛中洛外図屏風と風俗画」

期間：2012年3月27日(火)～5月6日(日)

場所：国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）

